

本草雜記

八

2258

月源



柳 西石因原三年

市三信町柳原三年







と云物〜中をなぐる審選の運傍ゆを家  
自中に行ぐを蘭の花を果る〜と思ふ  
れと折悪なる想かあせ〜ありと云物  
成り学をかざるしの中あり内と學まれ  
概〜と云物を怪異と稱し中々を毒を  
なす〜其を信をま〜と稱の言ひ  
〜新〜色〜審選の運傍ゆを〜  
蘭〜のち〜審選〜と稱ゆをなす  
唱〜は〜是を〜日比〜をなす  
〜と云物〜は〜は〜は〜をなす

授中々〜と稱ゆを〜と稱ゆを  
除ゆ〜と稱ゆを〜と稱ゆを  
能〜と稱ゆを〜と稱ゆを  
去の筆の物と其の便あり〜  
信〜と稱ゆを〜と稱ゆを  
其の意の運傍ゆを〜と稱ゆを  
字力と其の載る字海あり〜  
悪魔の歌の字の意あり〜  
其の書と其の字の意あり〜  
〜と其の字の例と其の字の意あり







権の上より徳傳も言をてり者命と行言  
か小徳と著つ木晶の津野年  
ふの 皇中と津野も切もと世傳つ  
初とて思後より其津野の先はすを  
何人ん言と足  
病もあむし僧も思ち念経  
か。答も其常を著志  
をを能く而  
か。木晶を少云く  
を是つとつ 漸く言ふ事つとひ

と徳ひま  
其智の遠路を著し  
此ひとれ又木晶津野つ  
と見ふよや。大徳と事  
何権の上より其津野も切もと世傳つ  
其長三と云ん  
と徳ひま  
か。木晶を少云く  
を是つとつ 漸く言ふ事つとひ









しつとを玉と念おくる叫と信を思ふ思はし  
と路に御の雨とあり物ゆしの君も若者なり  
と吹雪の玉を思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
海も雪も思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
の残り音と又道三の形見我今を候る事  
是る事と馬を事と思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
海も思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
平也思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
物と思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
と物と思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
栗久利

物も思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
海も思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
物と思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
と物と思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ  
栗久利





























きしなわのなを事と思ふ心あるははるをさつ  
ぢえあゆ折角柳代雲と化すも中を  
女あまは是れ身をいふ悔しとまのわくと未  
つたうあつとらまつ印と名あつと雲折あゆ  
り如か懐しと足つ痛め喚わつと張合と其  
有はれ左と右を又と澄るあまはゆめゆめ  
あまのひの牛とあつたのて道つと居を逃  
退しつと移長と上と跡まゝとまゝと北あま  
折角ゆめゆめの方を来つとあまの橋の男を人  
有余り有るんうと思ふもふりとはえぬ板

の竹と水とつとつと横とく成志と冠とを信と  
志多つとひ中れ月とと玉と持と面と作と  
揮ととと舞とととと事と志有と是れん  
命とと知とと誠と捧葉の葉とあんの  
あまのうと左と右をわつと折あまを皆女と  
可也旅かんと思のうとあま研う知れを来し  
志と平柳とととと思とととと女とあんと  
捧つと口ととと有とととと化れんととと  
折ふゆとととととととととととととと  
うとととととととととととととととと







而一と過て去る事なきを以て  
新造りて世に示す所也  
常牛牛もいと長所を以て  
も又此の如く  
事証おむる事  
古事よしと云ふ事  
少及長外古久久  
人所古備有河  
言ふは此切也

盗人の中  
人福も  
行か  
多し  
初  
捕  
其の  
同  
其  
其

















中へ書局の所を以て志す旨ありき  
ふとくも病子の事なれども  
常向と別ありは何れも  
我流山下の事  
合も有る事  
心は  
際を  
書局へ行くと

胸裏に  
他は  
石  
心  
其  
向  
身  
監  
の









布子修物ゆきしよあれをなむらせむ彼  
神のくまるとるを各すは遠くは志をけ行神  
とぞや有き是ぬとて知るも先かふ  
おき事くさう返れ新果有くも機をなめ  
陳まう新盛石じふお遠く一是ありて未  
半やとてけ行神と布をゆきみゆしと遠  
くび家少あわち病をくまするもるを  
くつとをよの月ゆ思ふぬくを建共を  
は遠城は世あくと云中し成とせ  
まう行神をふ布子あむあれを共を

云解ん中まあし系う水運と編ゆ外を  
思ふるあくと助とまきえくをりの中を機  
布上るゆききりゆ中し金を言はし  
思ふ一あと思ふをや毛免張一ある京  
とゆきをし書む天の側のがる思ふく是ゆ  
あし系水運のゆききりゆとを何か  
せん書ゆく箱を仕舞の心ふらうせん  
と遠く白木一ありしを彼張んをさる  
ゆきとすくさるるをんをんをんをんをん  
のこし思ふくあんをを機あををあり

























本草綱目卷之八  
終